

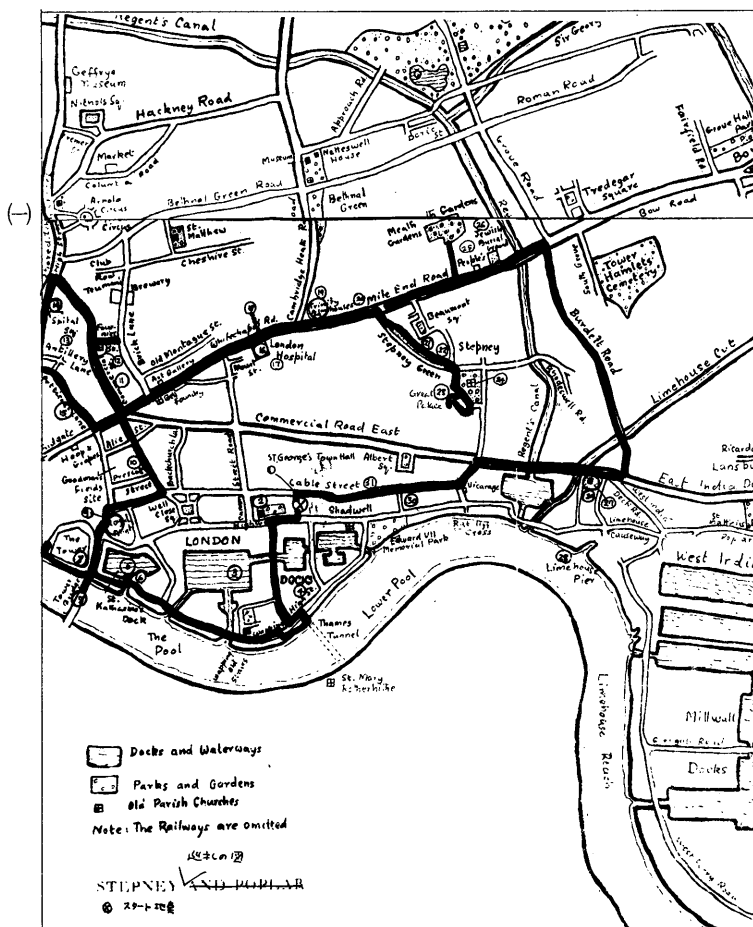
「Stebb's Hyth」、プリグリムの記

— つまり十九世紀、「隣人」運動家を訪ねて —

山口 信治

ロンドンにしばらく滞在していると、日本から来られたお客（学者先生）さんから、「マルクス先生の墓地はどこに？」

というお尋ねをよく耳にする。一度、二度ならいざ知らず、そう度々聞かれるとあつては、それを知らずしてはまことに



背身が狭い。大雪のあつた翌日めずらしく青空と陽が顔を出した。オリゴセノ墓地に明るい陽ざしを浴びた彼の胸像を訪ねたが、これが私の最初でまた最後の感動ぶかい対面となつた。

ところで、何故、日本人はこう墓参りが好きなのだろう？他人ごとではない、今回私のこの地の訪問も亦墓参りといつても良い。つまり東ロンドンに蒔かれた一粒、いや博愛主義という種と、そこに咲きかつ散つたそれを見るためのものだった。とは言うものの決して私は生物(種)に興味をもっている者ではない。むしろ、社会事業を志さず者として十九世紀、地(ここ)に落ちた「隣人」運動家たちとの邂逅を求めるものだ。あえて「邂逅」という言葉を使ったのは、ただ、言葉をむつかしく表現しようというのでない、私なりの意味の深まりとでも言っておこう、「体験」をこえて「経験」にまでそれを高めようとしたところのプリグリム、(巡礼)だし、実はこの紀行文の題名に「巡礼」(プリグリム)としたのもそのた

めだと理解してほしい。

(二)

私の巡礼先きは、東ロンドン、しかもステプス・ハイスこと「旅立ちの地」へだ。ここはロンドンバラ (London Borough) のひとつ、タワー・ハムレット (Tower Hamlets) のほぼ中央に位置する処で、今日、「ステップニー」(Stepney) として名をとどめている処だ。

ところで「ステプス・ハイス」(Steph's Hys) 英語ではない。今を遡ること八百年まえ、つまりアングロサクソン時代のもので「旅だちの地」に由来したものだ。(当時の人口調査簿に地名としてこの名をとどめている。)

確かに、ここから世界に向つて多くの勇敢な船乗りたちが船出をしていった物語は少くない。例えば北イーストと支那を発見したR・チャルマーにしろまたヴァジニアに向つて旅立つたデイスカバリ号のキャプティンJ・スミス、それにメイフラワー号等々、どれひとつ取つて

も「ステプス・ハイス」の名にふさわしい物語りの主人公たちだ。それにもう一つ私は別の「旅立ちの地」にふさわしい主人公たちを見る。「隣人」(グッド・ニイバー) 運動の先駆者たちのそれだ。

(三)

少しくアングロサクソン人の侵入まえのインペイダーたちの様子をみておきたい。ずーっと遡つて人類のあけぼのにまでそれを進めるが、その手がかりはケンジントン大博物館だ。今その年表と資料から、(一)前史、(二)ローマ、(三)サクソン(中世)三時代に大別できる。さらに(一)の前史は石器、ブロンズ、鉄器に分けられる。さてこの人類のあけぼのに関する資料から、このステプス・ハイスが歴史の舞台となつていたことが分かる。

今日の、ロンドンの地形は、ほぼこのMesolithicとNeolithicの最後の時期までにでき上つたというが、実はこの時期に人類のあけぼのが初まり、石ころを握つた遊牧民(Nomadic)として住みついた

ことが判かる。今その「手」の延長ともいえる道具がいくつもみつかつている。柄の部分握れるように加工し、さらに先の部分を刃物状にとがらしたものの（おの）や、獣肉や皮なめしに使ったと思われるナイフ類、その他火打ち石など、これはまた人類が初めてインペイダー（巨象）にたち向った戦いを知る上でも貴重な資料といえる。（鷹陵第八〇号、三十一頁参照）

ところで何故、人祖たちが石ころを持つてここに集つて来たのだろうか。その理由はそうむつかしくない。即ちここが格好の猟場だからだ。人祖にとつて格好の猟場はまた、彼らも格好のえものをとる場所なのだ。最後の氷河期にできたツンドラがとけ、しげみや森々は小動物を集め、またあちこちの水たまりや浅瀬には魚やそれをまちかまえる鳥類が集まつたと考えられる。つまり食物連鎖のミシング・リングなのである。

人はその狩猟法を石ころから弓矢に変えた。この高次の生活様式の変化は人祖

たちを容易にそこに定着させることになった。次いで、さらにそれを可能にしたのはファーム、つまり農耕のそれである。彼らはロンドン・クレイをやいてかめを作り、収穫物を貯えその定着生活に備えた。石ころもたたつ切る道具から土地を耕やす、くわやすきに変つた。

次に人々は新しい物質文明を獲得した。金属を使用する時代を迎えたことだ、まずは銅とすずの合金から、さらに安価で材質のかたい鉄へと、そうして従来の交換経済から貨幣のそれへと社会を高揚させた。また交易を広めるために道路網を整備、拡大することになる。

その後、BC四百年にはローマからの侵略をうけるが、きせずしてローマ軍の「チエセスター」からロンドンに進駐してくるトラック道路となつた。承知のとおりロンドンに侵入したローマは都市ロンドンディムを「ブリティン・ローマ」として商業都市として大いに栄えさせた。

その栄誉はタワー・オブ・ロンドンの石の城壁と、「タワー・ハムレット」の北

部を東西・バスナル・グリーンからボウに至る巾三〇メートルの「ローマン・ロード」の石だたみに見ることが出来る。その他、当時、ここには三本の道路網が整備されていたが、みな食糧をシティに運ぶ重要な幹線（産業道路）として整備されていた。

重度なる恐しいテムズの氾濫と、その運んだ肥沃な土砂は、自然の灌漑に、豊かな農産物を恵んでここに人々を集めた。とくに砂地に適した作物と果実はロンドン市民のテーブルを楽しいものにした。しかも、彼らが口にするパンの多くは、ステプス・ハイスのさらに東側にあるライムハウスでとれた麦をひいて作つたものだが、川沿いには粉をひく水力機械のやぐらが立ち並び、一層のどかな田園風景をつくつていた。

また、サクソン期の末までにはステプス・ハイスの西、ホワイトチャペルはロンドンの郊外として発展する。商業に、旅行者のはたごに、交換のためのマーケットに開発の手がのびる。従つてそれら

の開発はそれまでの「静かな田園」の姿を徐々に変えはじめていった。ところでこの開発の担い手たち、それは、シティにて商いを許可されなかったユダヤ商人と小企業（工業）家たちだ。彼らの多く

はこのホワイトチャペルの道路沿いをかいいしめ、商いに、生産にはげんだ。ついに、一二五〇年頃までには独自で、つまり他から援助をうけずに教会をもつ程の財力をもった自治体となる。さらにこの郊外化に追いつけをかけたのがフランスとの戦いをきっかけに盛んになった造船業だ。これは技術者や熟練工、それに多くの未熟練労働者をかかえはじめ、川沿いに簡易ブリック（レンガ建ての家）をつくって住んだ。また、このステブス・ハイスの北に「ベスナル・グリーン」（アングロサクソン時代のリトリート・保養所）も、次に迎えた十六世紀からはじまったドック建設に、スピタルフィルド・マーケットやペチコートレーンの名で知られる市ができ、その取り引きや交換に、さらにその後の産業革命の工業化によって

一度に多くの人々を集め彼らの住宅地に変つていった。こうして「東」の地図を書きかえていったのである。

(四)

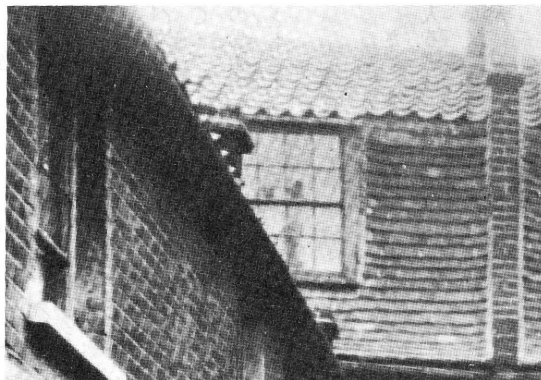
新しい地図にぬりかえた「東」と「西」、いつの時代かさだかでないが「東」と「西」という人の心にまがきをつくつてしまつた。外敵の侵略を防ぐ城壁は城の内と外とでは第一安全がちがう。その他、当時ローマはシティ内の墓地を認めず、堀りおこして城外にうめた。その第一の候補地にステブス・ハイスの西、ホワイトチャペルが当つた。従つて今日ここから当時の墓石や碑が多く出土するのもそのためだ。ところで我々は何故にここ（墓場）に人々が住むようになったかという人間生態学上、大変興味をもつ、住人たちの多くはシティに自由に住むことのできる自由人ではなかった。むしろその市民権すら与えられなかった連中で「貧しいユダヤ人」をはじめアイルランドからの貧しい離農者、エンクロヂアで追われたロンド

ン周辺の農民たちだ。しかも、ここは彼らの未熟な労働力を必要としていた。マーケットにドッグに荷あげ人夫として、商工業の未熟練工として吸収されていった。だがその住み家は墓場の周辺の安宿か橋下、路道に身を休めた。「貧しさが貧しさを呼ぶ」というが貧困の物語りがはじまる。貧しさはまた、ぬすみ・かつぱらい・人殺し・売春・汚水のたれ流し・スラム・流行病（とくにこの地方を襲つた「黒死病」は死人を埋葬するスカパンチャー自らが掘つた穴に埋められるという悲惨なものであつた）として人々の心と体を毒した。その上人々をここに集めた理由の一つにサクソンのキリスト教化とその布教の拠点とした修道院に施与所・病院などと無縁ではない。むしろその戸口で毎朝施こす小銭や食いのがそれで、ここに群がり集まる「東」のみずばらしいベガー（乞食）と彼らの住む不良住宅（スラム）、不衛生、犯罪等々ははたまた、「神に見捨てられた所」「けがれた所」「病気の発生源」とまでウエストの住人に偏

見を作り出してしまった。

(五)

こうしてながい間、この「東」^{イースト}は閉ざされた「神に見すてられた地」として人々におそれられ、その接触の機会さえ全くと言っていいほどなかった。ようやく十八から十九世紀教会のメンバーによつ



オクタビアヒルの住宅改良

て西と東に橋がかけられた。その担い手たちこそ私がいう「隣人」(Good neighbour)たちなのだ。そこで当時彼らがみた「ステプス・ハイス」にもう少しわけ入ってみることにしよう。

W・ビザントをして言わしめるならば、まさに「神に見捨てられたところ(貧乏人の町)」は「ホラブル(恐怖)な町ステップニー」であった。その一節より「ヘルピング・ハンド」の項を抜粋してみる。(別にヘルピング・ハンドの発達史とも読みかえてもらつて結構だが)

ひとつ・彼らが貧乏人で可憐だから
小銭(一ペニー)を投げてやつた。
ふたつ・修道院の戸口に群がり集まる
貧乏にめしと、宿をタダで与えた。
みつ・小銭もめしも宿も世話した。
そうして一言「まじめにおやりなさいよ」……と。

よつつ・にもかかわらず一向に貧乏人が減らない。ひとつとらえては鎖になぎ笞を当てやき印を押した。これで数が少しはへるだろう。

いつつ・年老いた老人はアルムズハウスに収容した。もう彼らは小銭さえ拾うことができなくなつたからだ。

笞を当て、めしと宿を施した。

むつつ・まだ貧乏人がへらない。銭を与え、その上ワークハウスに引っぱつていつてうでに仕事をつけてやつた。

ななつ・それでも仕事はない。そんな仕事にあぶれている連中にはレセプションハウスに世話する。病める連中には施与所に、そうして傷に薬をぬる。腹を空せてるガキどもには孤児院をつくつてかくまい食わせる。家のないものには、かり小屋を建てて雨・風をしのがせた。

やつつ・ようやく人々は法律をつくつた。それでも小銭だけは忘れなかつた。連中が貧乏だから……。

このつ・協会をつくり、あちこちに配備した。慈善家の情にすがって生きるごろつきやルンペン・なまけもの、に、必要な、科学的なサービスを

施すために、でも、連中はな、自分^{オレ}で生きる権利をことごとく捨ててしま

つてゐる気の毒な者たちだ。」……。

これで分かるようにおびただしい数のベガーがいたことになる。一八八七年のC・ブーツの調査によると「in-door, out」の受給者がざつと十萬ケースにも及んだとも言われている。

(六)

さて、ステップニーのホラブルへ押し入る訳けだが、それに通ずるルートにはいくつがある。一例を挙げれば「オリヴァ・ツイスト」の著者、チャールズ・デイクンズの「イーストワード・ルート十五」、社会調査家チャールズ・ブーツの「ホワイトチャペルとセンド・ジョージ・イン・ザ・イースト」、それに歴史家W・ピザントの「イースト・ロンドン」だが、今回はお許しを頂いて私の推薦する「ルート・トウ・グッド・ニイバー」、言うなれば「博愛主義者（隣人）への旅」とでもしておこう。

出発は、セイント・ジョージ・タウー
ン・ホール①からはじめることにする。

ここは通称シャドウエル(SHADWELL)と呼んでいる処だが、先のルートで紹介したチャールズ・ブーツのもっとも注目した地域である。何故ならば、彼のいうボーダーを割るパウパウ(Pauper:極貧)の居住区であつたからだ。その教区教会はこのタウー・ホールの西側にあるセント・ジョージ・イン・ザ・イースト教会②―デザインN・ホオルズモア(一七四一―二九)―であるが、ここにはベガーと称するふうらいぼうと売春婦の多い地区であつたところから、この名はあたかも「売春」の代名詞のように使われていた。とくに我々が立っているこのハイウェイ通りには昼はものもらいが、夜には売春婦が町に立つて客引きをしたところでもあつた。

さて、この道を横切りつき当つたところがワッピング(WAPPING)と称するところだ。右手にロンドン・ドッグ③と

その周囲に倉庫群が建ち並んでいる。このどんつきにはワッピング駅がある。

ところでこの前のエスカルゴ④(公衆便所)をのぞいてはみませんか? 目にあまるような当時のワイセツ画といったずら書きが残っている。そのいたずらの中にこんな広告もある。「排尿時かゆみやたみがないか、うみ(膿)か血が混っていないか、先つちよや鼻がとけてはおしまいだ:美男子諸君よ。暮々もご注意、ご相談あらば最寄りの……と……」。さしずめ「性病予防協会」のPRであろうか。当時の衛生改革者たちの苦慮の跡が伺われるようだ。ドッグ沿いに西にワッピング・ハイ・ストリートを進むと「ハ」の字型のセイント・キャサリン・ドッグ⑤とそのかいわいに建ち並ぶ倉庫群、なかでもひとときわめだつ高い時計塔をもつ五階建てのイタリア式のアイボリー倉庫だ。さらにチャールズ・デイクンズを記念したパブリック・ハウス(のみ屋)がある。でかいジョッキに黒ビール「ボニー」のどをうるおすのもまた乙なもの。余談になる

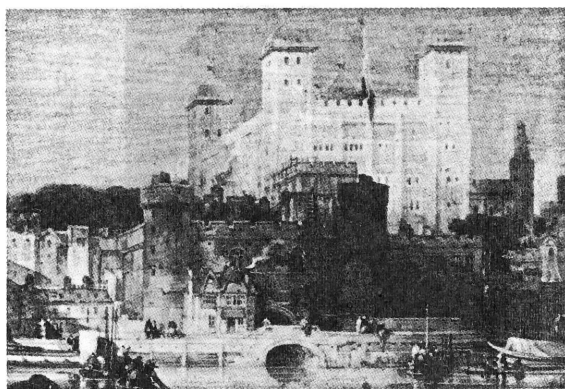
がこの跳ね橋の向うにあるビルがミスター・サダカネとミスター・カミヤがお宿りいだいた「タワー・ホテル」だ。(みなさん方にはだに、南京虫で有名な「ホワイトチャペル・イン」(ジョン・テイラーの『ロンドン』から)に予約をしているので悪しからず)

ここは昔、セント・キヤサリーン病院と修道院のあった跡⑥である。僅かに古を偲ぶ礎石がディケンズ・インの前庭にころがしてあるが、この敷地内には高い塔(ものみ櫓)があつて、病人や浮浪者を見張っていたという。とくにここには外国人船員やアウトロー、それにアイルランド系の貧しい連中がひしめき合っていた処だ。

ドックの開口部からテムズ河のがめは最高。向つて左側には一八八六—一九四年、H・ジョンズによつて設計、J・F・バリーの手によつて建造された鉄と石の橋タワーブリッジ⑦、まさに英国の産業革命をほこるひとつのシンボルである。

さらに橋のたもとには中世最古の建築物

でもちろんロンドン最大の見ものとなつてゐる。高くそびえる四つの塔をもつ、「ホワイト・タワー」⑧、俗にいう「ロンドン・タワー」(一〇七八年N・ウィリアムの作)だし、別に「血の城」の名で知られているものだ。この城は時代と共に、宮城であつたり、造幣局、動物園であつたり、はたまた刑務所、処刑場だつ



タワー オブ ロンドン

たりした。最近、誰言うともなくこの城にゆうれいがでるとか。勇気あらばこっそり宿をぬけ、このブリッジから、夜のタワーを見るのも良し。(運良ければ足のるゆうれいに会えるかも)

さてタワーブリッジ・アプローチなるしやれた通りを北へ数十メートル進むと右手に鉄棚の垣のある建物がある。これが「ミント・ハウス」⑨つまり造幣局だ。コインにホビーのあるものは見逃がすことのできない処のひとつだ。唯、小生のように金にいちぎたない者のようであれば、つまり、やましい心を起すのであれば無理にはおすすしめない。

「ローヤル・ミント」を出てレマン街通りをさらに北へ進むと、左手に〇〇〇(消費共同組合)の本部の建物⑩が見えてくる。この運動のおこりは一八四四年、トード・レーン組合ロットデルのフランネル工場の職工二十八人が資金をもち寄つて、共同で購入し、さらに分配したことからはじまるものだ。さらにこれを理論的に指導助言を与えたのが、「フエビ

アン協会」(なくまで待とうホトトギス)の指導者ビートライス・ウェップ(シドニー・ウェップの妻君)である。今日各地にとくにステップニーにも数十カ所この拠点があるのも、みなこの労働者の組合運動の名りである。さらに北へ進むと西北に向うコマーシャル街通りと東西に走るホワイトチャペル通り、それに東南にのびるコマーシャル通りの複雑な交叉点に達する。この辺一帯を「ホワイトチャペル」(WHITE CHAPEL)と呼んでいる所で、当時「プアーヂュー」と呼ばれたおびただしい貧しいユダヤ人の町スラムがそれだ、従つてここではいろいろの「隣人」運動家らの活動がみられる。ところでこの地区最大の見せ場は、なんといつても「英国セツルメント」運動の発祥の地だ。これははじめて「西」から「東」部^{イースト}にかけられた橋、「隣人」運動の拠点である。正式には「ユニバーシティ・セツルメント・イン・ザ・イースト」(鷹陵第八〇号、海外研修近況報告、P 26 (28参照))というが、東部ロンドンに「開

かれた大学」ということになる。これが一八八四年、セント・ユダ教会の牧師キヤノン・バーネット、トーマス・ヒル・



キャノン夫妻

グリーンらによつてすすめられたもので今日この運動に献身した。バリリオール大学(オックスフォード)のテューター、アーノルド・トインビーの名を記念した「トインビー・ホール」^①だ。コマーシャル街通りの二十八番地に一風変つた、いうなればスラム街にふさわしからぬ十九世紀のエリザベス朝スタイルの建物二棟がサーバイバルしている。その階下右手は集会室、左手を講堂とクラスルーム、

さらに二階をレジデント(オックスフォード・ケンブリッジの卒業生でこの大学セツルメント運動の協賛者たちの宿舎)に当てられている。彼らの最大の目的は、「東」に移り住むこと、つまり入植する運動である。はじめに述べた通り、当時このかいわいは東部ロンドン唯一のスラム街でまさに「神から見捨てられた」ところ、「西」側の辺境の地であつて誰も近づくことのできないところであつた。したがつてまた、この勇氣ある行動に唯々脱帽するのみだ。ところでこのレジデントたちの役割だが、この地区の住人のフレンド・相談相手となることだ。彼らのモットーはこの運動の殉死者アーノルド・トインビーの「Not only money but also friend」金じゃない、友情をだ。つまり物質の施与ではなく、彼らの若い情熱と友情を貧乏ものに献げることだし、また彼らから友情を獲得することにあつた。このヒューマン・インフルエンス(個人的接触)を介して、人々を勇気づけ、彼らに教育と福祉の機会を与え、それによ



トインビーホールの面々

つて彼ら自らがセルフヘルプ (self-help 自助) することを援助するところの人的資源となることであつた。またここは後の労働党々首、クレメント・アトリや、英国福祉国家の計画者 W・ビーバレッヂなど若い青年期、レヂデントとして「隣人」運動に参加した者たちだ。

次ぎにこの辺一帯はブーツ將軍の名で知られる「救世軍」の活動をはじめ、「チ

ヤーチ・アーミー」、青少年の健全育成とその活動の指導者、また児童院の創設者ドクター・バナード、N・ハックフォードのおこした小人病院「イースト・ロンドン病院」、さらにドクター・J・ハリソンらによって献堂された東部随一の病院「ロンドン病院」(一七五七年)。それにチャールズ・ブーツの名は社会調査をやる者には忘れることのできない人物だが、その著作と調査は「Life and Labour of the People in London (first series: series: Poverty. vol. Part 1. East London 1902) まさしくここが拠点だ。

彼の調査の結果から、このホワイトチャペル地区の四割が貧しき者で、しかもその内七割がユダヤ人で占められていて俗に言う「プアー・ヂュー」たちだということを指摘した。したがって、そのベガー(腹すかし)にあらゆる施こし(アルムズギビング)がなされた。その内今日にその名と建物を残すものに「スーパークITCHEN」(たきだし)である。その他、授産、教育、C・O・S など枚挙にいと

まがないほどである。

唯、我々が忘れてならないのは、彼らの働きに共通して見出しうるものは、何度とも言いつけてきたように「隣人」なのだ。しかもそれはただもの施すのでも友情を獲得するものでもなく、「Consciousness of sin」つまり「罪の意識」(B・ウェップの評)がそれだ。「われわれのあやまち(偏見差別)を告白し、諸君の許しを乞いたい」(A・トインビー・著「産業革命論」とびらより)という心に秘められたものの自然の発露だと言つて良い。この精神こそ我々社会事業家のこころすべき原点だと思ふ。

さて、ここをあとにしてさらにこの通りを北にすすむと「スピタルフィールド」(SPITALFIELDS)地区に至る。この中心は「クライスト・チャーチ・スピタルフィールド教会」^⑫と一六八二年に、「Royal Charter」が設けられたところだ。残念ながらヘンリー八世の「リフォメーション」で病院や修道院のすべてがとりこわされ、その莫大な跡地に生鮮食

料品や生花のマーケット（スピタルフィールド・マーケット^⑬）としてロンドンの市場センターとして開発されて今日に至っている。ところでこのマーケットにはもうひとつ、ミゼラブルな取引が行われていたことに注目してほしい。つまり

人身のそれだ。もつとも人身とはいえ人身買売ではない、九才から十才の子どもを週十四ペンスから一シリングで他人に貸出すというのだ。ではどこに引取られていったかが興味あるところだが、迫害

をのがれてスピタルフィールドに移り住んでいたフランスの「ユグノー」(Huguenots)のシルク職り（Spialfield silk）の店や工場にだ。ある者は手伝い（掃除）に、また家のまかない人（雑役人）として子どもたちが重宝がられていた。周辺の貧乏人の子どもたちがかき集められ、取引

きされていたところだ。
ところでこの地区の「隣人」たちの中には、伝道者、ジョン・ウエスリーと貧しい子どもたちを家に集めて「サンディ・スクール」^{よみ・かき}を教えたウエスリー

の母親^⑭の働きをあげることができる。さらにはスラムの住宅改善家、オクタビア・ヒル女史とその集金人たちもこの一角に居をかまえ、盛んに「隣人」運動を展開した処でもある。

さて、このミゼラブルなマーケットから南へ「ビッツパゲート」大通りを下がる。リヴァプール駅前から東南に狭い通りがある。ここが毎週日曜、朝市のたつオープンマーケット「ベチコート・レーン」^⑮である。

このどんつきがステップニーを横断する「ホワイトチャペル通り」「マイルエンド通り」―「ボウ通り」さらには、「ニューハム」へと続く幹線道路である。その「ホワイトチャペル通り」の中間にロンドン病院^⑯があるが、この辺一帯を「ステップニー」と呼んでいる。さてこの病院の病理室にみなさん方を案内することにしてしよう。そのネライは、当時奇妙な病気「エレファント病」の標本を見てもらうためだ。手足が象の足のようにはれ、その病原菌は頭や顔にも至たり、頭に大

きなコブのようなものが出来る。この名のいわれはむくんだ顔に細く切れた目がちようど象のそのようになるところからだが、難病のひとつだ。しかも、これが二ペンスを払えば見られる見世物だったというのだからおどろく。

その他、このかいわいはステップニー、ホワイトチャペル随一の娯楽センターであった。「Mix bag of Palaces of varieties」などミュージカル・サロンをはじめ、ドラマ、サーカス、パントマイム、「Penney Galt's fan fairs」などの様々な小劇場が軒を並べて客を呼んだ。むろん夜の歓楽街につきものの少女たちの売春も、霧の街、ホラブルの町ステップニーにあでやかさをそえた。その「ヒルポット街通り四九番地」^⑰にエドワード・デニソンという青年が救貧法のガードイナートとしてここに入植していた。彼こそ我々が探し求めていた「隣人」運動の草わけである。彼の働きは、大林宗嗣の「セツルメント研究」(同人社・大正十五年)の一〇三―一〇八頁に詳しく述べられているが、

その一節に「一八六七年、彼はステツプニーのフィルボット街に移転する決心を固め、八月ここに居して親しく貧民と接触して、改善に没頭することになった。

……中略……彼は彼らを救う途は物を施す事でなくして自活の途を與ふる事である事を知るに至った。」と、そうしてその救済策として「彼らに居住を與えて宗教家やボランティアと隣人の交りをなす事によつて漸次改善する」というのだ。

さらにこの病院の北側、つまりホワイトチャペル通りの北トマス街通りの公園⑮に小さな記念碑が立っている。実はここで「救世軍」のゲエネナルウィリアム・ブーツが最初に世界にむかつて「サルベーション・アーミー活動」を唱えたところだ。時は一八六五年六月二日である。その生涯をかけた彼の理想は「In Darkest England and the Way Out」

(1890) の第三章「The Homeless」^ナ、第四章「Is There No Help?」は福祉プロバの必読の章であろう。今日彼を記念するホームがホワイトチャペルに男・

女ホーム一つづつ、スピタルフィールドに男子用一つがオープンされている。一宿一飯、めしに白いシートと毛布を与え、翌朝は彼らに仕事をというグッド・ニーバアー運動が息づいているのを見る。

大通りにもどり、再び東に向つて歩くと、その左手に今見てきたW・ブーツの胸像⑯がロンドン病院に向つて立っているのが見える。さらに進むと左側にベスナル・グリーンへ向う「ケンブリッジ・ハース通り」とそのコーナーに変わった二種のブリック（レンガ建ての家）を見る。奥には小さな可愛い教会が緑の芝で整理されている。この建物は「トリニティ・アルムズハウス」。この地でもっとも古い養老院である。⑰船のりの引穩した人々のために作った（一八九五年）もので定年後静かな田園で余生を送ろうとしたものである。さてこの先の右手の「ステツプニー・グリーン」を南に下がると、左手に東ロンドン・ボーイスカウトの本部（ローランド・ハウス⑱）がある。彼の名は青少年の健全育成に関心をお持ちの



ボーイスカウト ローランドとローランドハウス

方なら誰でもこのローランドを知らぬ者はない程だ。（余談になるが先だつて教務課のミスター・タチ、通信学部のみスターニシオらが研究室に立ち寄り、このローランド・ハウスの写真を見てくださいたほどだ）またこのハウスの隣りがユダヤ人の病院⑳、この病院の古い記録の中にはこの地区を襲ったブラック・デス―

黒死病―で死んだ様子がイラストで残されている。まことに見るも無残なありさまである。

このどんつきが「グレート・パレス」²³のあったところだ。「グレート・パレス」といえば「マグナカルタ」はもとより、英国の国会が実はここにあった処として注目したい。人の歴史とはいえ、かつての政治の中心地として栄えた「グレート・パレス」は、今は空地としてその姿をとどめているに過ぎず、それとは対照的に西の一角には古いスラムが人をも寄せつけず戦火の煙りを壁のレンガに残して建っている。このパレスの東側がセント・ダンスタン教会²⁴である。「ステプス・ハイス」当時の母教会である。この敷地内にある墓地には有名な墓が、また偉大な人々の魂がいくつも眠っているの、それを訪ねてみてほしい。

道をウターンしてもらって再び、「マイルエンド通り」に出る。そこから右に折れ三分の一ほど東に行った所に、「ピープル・パレス」²⁵なる大きな殿堂が目に入

る。この建物は一八八七年、ヴィクトリア女王によってテープにはさみが入られオープンしたものだ。市民の催し物のセンターである。当時を語る記録によると「サンデー・アフターヌーン・コンサート」には凡そ三千人もの人々が詰めかけたという。その他、絵画の展示会に、社交ダンスや討論会に名実ともに「市民いこいの家」として住民に無料で開放された。今日この跡には「クインメアリー大学」がおかれ、若者たちの勉学の場となっている。

ところでこの「ピープル・パレス」のために労した隣人は、ユダヤ人首相、J・ディズラエリである。その父親が安んでいる墓地²⁶がこの隣りにあり、日本からの政治家たちの墓参のひとつにもなっている。

墓地のとなりを流れるリージェント運河を渡り、「パーデエット通り」を南下すると、そのつき当りが「ライムハウス」(LIMEHOUSE) ここはもともとロンドン最良の自然港で、すでに十二世紀に

世界に知れわたったドックとその港町である。さて、この「ライムハウス」だが、麦(ライ麦)こがしの小屋から由来すると言われている。ディケンズの「ルート・十五」にもここは終着駅として美しく書かれている。

一層景観をひきたてたのは、セント・アン教会²⁷とこのライムハウスの港²⁸だ。一種の旅情とでもいいところだが、今にその威風をとどめている。この教会の西となりに今日タウン・ホール²⁹になっているが、一時労働党の党首、クレメント・アトリーの私邸として使われたところがある。今日この跡を、「労働記念館」として一般に公開しているが、その博物館のドアを開けると、正面に「労働者の父」ロバート・オーエンのエッチングをかけてある。入口の案内書に従って会場をひとまわりすることにすが、ここには労働者たちの開放に献身した多くの「隣人」たちとその物語りがパネルになつて、我々の足をひきとめる。それはまた、「英国ソシアリズム」運動史のペ

ージェントでもある。とくに一八八七年十一月十三日、俗にいう「ブラディサンデー」、労働運動史上決して忘れることのできない大事件が国会前でおこった。その模様が当時の新聞「イラスト・ロンドン・ニーズ」紙がパネルにされて展示されている。三万とも四万とも報道されているが双方に犠牲者を出してしまったほどの大事件だ。それに労働者たちの戦い「三大ストライキ」で知られる一八八九年の「マツチガールズ・ストライキ」をはじめ翌年の「ドッカード・ストライキ」「ガスワーカーズ・ストライキ」が当時の様子が手にとるように説明されているのが興味をひく。とくに、昨年は「国際婦人年」の年でもあり、それに因んだ、女性開放のため一生を献げたペインや、「女性開放同盟」を組織したエマー・パターソンらを偲ぶ遺品も見られる。また、改めてA・ピザント女史の手になった「マツチガール・ストライキ」とその女性開放の歴史とをふかく考えさせられる処になった。

「たそがれのロンドンから」とは木村治美氏の題名だが、このライムハウスから見るサンセットはその表現にぴったリだ。セント・アン教会の白い塔には夕焼けの真赤な色がはえている。ブッチャー通り」から、いく分狭い「ケーブル街通り」を通過して、元のタウン・ホールに向う。その途中にドクター・バーナードの建てた孤児院^③がある。この辺を「シャドウエル」(SHADWELL)というが、そのホラブルな物語りは貧しさのあまり人の肉をも喰うといういたましい光景があるほど人々が貧しかったと言うことだ。従ってまたドクター・バーナードらの働きが並大抵のことではなかったことが伺い知ることができる処でもある。しかも、この我々の通っている「ケーブル通り」^④はもう一つ身の毛のよだつようなこと、即ち連続殺人事件があったことを思い出させる。まさしく時のロンドンをホラブル(恐怖)のどん底におとし入れた事件がおこった所でもある。ヘンリー・フィッディングの組織したC・I・Dをもつ

てしても、犯人はおろか、またしても犠牲を出す有様だ。しかもその犯行ぶりは残虐で、鋭利な刃物で男性のシンボルを切り取ったり、女性の性器をめつた切りするといった具合、その上心臓部を数十カ所をさすという乱暴ぶりだ。さすがのC・I・Dの検査官もたじろぐ程のすざましさだ。数週間後、ジャックという一人の男がとらえられ、取り調べの結果、ついに口を割った。彼こそ世にいう「殺人鬼ジャック」だった。ところが獄中で自害、これに不満をもった市民の感情はおさまらず、市中ひきまわしの刑を要求して集った。ついに大八車に乗せて死人を市内をひきずり廻した。それがこの我々の通っている「ケーブル・ストリート」なのだ。今から凡そ百年まえのことだ、とは言え身に寒気をおぼえる。日はすっかり落ち、長い闇が訪れてきた。

ホワイトチャペル・マダー(殺人)パ
ブにて――

巡礼の記を記す。(一九七九年十月)

(やまぐち しんじ 社会学部助教授)